2008 年 12 月 31 日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

ペインクリニック領域と漢方医学

昭和大学横浜市北部病院　麻酔科　教授　　世良田　和幸

（4）神経痛に対する漢方治療

神経痛とは、一般的な名前ですが、その概念がなかなか難しいのではありますが、リウマチなどとともに、今日は神経痛と名が付いている代表的な二つの疾患、「三叉神経痛」と「帯状疱疹後神経痛」の漢方治療についてお話ししたいと思います。両方の疾患とも、詳しく述べているととても 10 分少々ではお話しできないので、要点をお話しできればと思います。

それでは早速、始めます。三叉神経痛と漢方についてお話ししたいと思います。三叉神経痛は、症候性（例えば、腫瘍や炎症など）の原因によるものと、特発性と呼ばれる原因のはっきりしないものの二種類に分けられます。

三叉神経痛の痛みは、会話やひげそり、歯磨きや食事をするときなどで誘発されることが多いのですが、誘因もなく発症することもあります。西洋医学的な治療法としては、カルバマゼピン（商品名テグレトール）などの抗てんかん薬の投与や神経ブロック療法、手

術療法などがあります。

漢方医学的には、三叉神経痛の原因は、風、寒、熱などの外因によるものと、肝胆の欝熱や気血両虚、瘀血などの内因によるものと考えられています。これらの病邪が顔面の経脈の気血の運行を阻害し発症しますが、これは痛みの漢方医学的理論である「通じざれば則ち痛む」という理論に通じています。

最初の外因による三叉神経痛ですが、主な症状としては、風寒邪が顔面に侵入することによって急性の循環障害が起こり発症いたします。症状としては発作性に激痛があり、寒冷刺激により痛みが増強し、温めると軽度となる、といった特徴があります。これに対する漢方薬としては、川芎茶調散という漢方薬が使われます。これは、悪寒、発熱、頭痛などを伴う場合は葛根加朮附湯を用います。また、胃腸症状が強い場合には桂枝加朮附湯を用いまする。

もうひとつ、内因による三叉神経痛に関しましては、風痰阻絡、風邪の風と痰湿の痰、これらの流れが悪くなる。脾胃の消化吸収機能が乱れることによって、痰湿という状態を生じます。このときに風邪が顔面に侵入し、風邪とこの痰濁によって顔面の経脈を阻害し発症する症状であります。こういった症状に対しては半夏白朮天麻湯合二陳湯などが用いられますし、手足に冷えがある場合には五苓散が用いられます。

もうひとつ、過度のストレスや七情など喜怒哀楽の変化により肝胆の疏泄機能、流れが悪くなると、肝胆の気は欝熱して熱に変化いたします。肝胆の欝熱が顔面に上昇していくと気血の流れが乱れて、経脈が塞がれてしまうために三叉神経痛が発症するという場合です。症状としては、発作性に顔面が焼けるように痛むとか、様々な情緒の変化により増悪することが多くみられます。イライラすることや怒りっぽく、赤ら顔、目の充血、口の中が苦いなどの症状がありますが、こういった肝胆の欝熱による症状に対しては竜胆瀉肝湯が用いられます。

これらの痛みが長期化すると、気血両虚や瘀血により、症状がさらに長くなるということがあります。気血両虚によって気血の運行が停滞する場合には補中益気湯合四物湯、瘀血と呼ばれる、気滞や気虚により気血の運行が阻害され瘀血を生じる場合には桂枝茯苓丸と川芎茶調散を合方したものが用いられます。

次に、帯状疱疹後神経痛ですが、帯状疱疹後神経痛はきわめて難治の慢性疼痛疾患であります。いまだに治療する手段は確立されておりません。西洋医学でも、漢方ででも、また中医学でも同様であります。共通しているのは、帯状疱疹が発症した時に、いかに帯状疱疹後神経痛に移行しないように治療を行うかに実際はかかっております。

帯状疱疹は、いわゆる中医学では「纏腰火丹」とか「火帯瘡」といった名前が付いておりますが、その発症機転は、外因が毒邪いわゆる外邪の侵入ですね、内因が肝胆の火積や脾胃の湿熱などによると考えられています。これらの毒邪は肝胆や脾胃の失調を来しているときに侵入しやすくなり、こういった毒邪が皮膚に停滞するために疱疹や痛みを引き起こすと考えられております。そして、この帯状疱疹後神経痛は、大きく分けて、実証タイ

プの痛みと虚証タイプの痛みの二種類あることが考えられています。

まず、実証タイプの帯状疱疹後神経痛に関しては、疱疹が消失しても、寒湿邪が残って経脈に停滞して気血の運行が阻害されて起こります。症状としては、痛みが非常に激しくて、寒さによって痛みが誘発されたり増悪したりします。慢性的で固定した激しい痛みがあることから、瘀血の存在があるとされています。しばしば四肢の冷えを伴って、患部をさすられることを非常に嫌がる傾向があります。この治療法に関しては、皮膚に熱感が強い場合には竜胆瀉肝湯を、肝気の鬱血を疏肝する場合には柴胡疎肝湯、これはエキス剤にありませんが、四逆散と香蘇散と四物湯の合方になります。瘀血症状があれば桃核承気湯や桂枝茯苓丸が使われます。

また、虚証を主とした帯状疱疹後神経痛に関しては、特にこの場合は老人に多くみられますが、老人は気血不足などの虚弱体質なために毒邪が体に侵入し、気血が虚弱なためにこの邪毒が体の中に停滞しやすくなり、気滞、血瘀、湿阻などによる痛みが遷延すると考えられています。この痛みは虚痛と呼ばれ、「栄えざれば、即ち痛む」という理論が背景にあります。痛みは激しいのですが、非常に波があり、しばしば胸脇苦満や両脇の脹痛などの張ったような痛みの症状を呈します。患部をさすられているのを好む傾向があます。治療法としては、桂枝加朮附湯や、冷えが強い場合には当帰四逆加呉茱萸生姜湯などが用いられますし、それから、気血両虚の場合には人参養栄湯が用いられます。また、滋陰補気、非常に体が消耗している場合には麦門冬湯または六味丸などを合方する場合があります。

帯状疱疹後神経痛のさまざまな問題に関しては、帯状疱疹の患者は中高年が多く、もともと気血不足の体質のあるところへ帯状疱疹に対する初期の治療において、清熱・解毒・燥湿の苦寒薬と言われる薬が多用される。こういった体を冷やす薬が多用されるために、気血不足とともに気血両虚をさらに増幅してしまう可能性があります。この苦寒薬には、NSAIDと呼ばれる鎮痛薬やさまざまなオピオイドが使われております。注目すべきことは、痛みの治療に専念するあまり、患者がその治療によっては陰虚の状態に陥っているのを見逃してしまうことであります。脾胃いわゆる胃腸が弱っている時は、特に注意すべきと思われます。この長期にわたる鎮痛薬の投与が、この帯状疱疹後神経痛を引き起こしている可能性を十分に考える必要があると思います。